グリルパルツァーの戯曲『オトカル王の栄華と最期』について

―オトカル王のヒューマニズムへのめざめ―

清　水　純　夫

1

グリルパルツァーは１８２３年、１３世紀に実在した人物オトカルを主人公にした戯曲『オトカル王の栄華と最期』を書いた。作品の中では栄華を誇ったオトカルが如何にライバルとの権力闘争に敗れ、ついに悲惨な最期を迎えるに到るかが描かれている。このようなオトカルとは一体如何なる人物であるのか。まずその考察から始めることにする。

世襲領土ベーメン、メーレンの他にオーストリア、シュタイアーマルク、ケルンテン、クラインなどバルト海からアドリア海に到る広大な地域を支配するオトカル王はその強大な勢力ゆえに次期の神聖ローマ帝国皇帝に選ばれるであろう、と誰もが思っている。彼は今や権勢の絶頂にあり、非常に傲慢になっている。それはたとえば謁見に訪れたタタール人の刀を、「反りすぎている！斬るのに力が要る。改めなければならない！」（Ｉ、３９０～３９１）と貶したり、弁髪を「頭のてっぺんの毛の束は何のためだ。敵を利するためか。毛の束は好き勝手にその主人を摑み、馬から引き摺り下ろし、思いのままに絞め殺すだろう。もし私が彼らの王なら、一晩のうちに全員の髪を剃らせるであろうに。」（Ｉ、３９５～３９９）と言って侮辱することにも現れている。これはオトカルが異民族の文化・伝統を全く無視していることを示している。

また、ハンガリーの王女クニグンデとの政略結婚を考えるオトカルは、ローゼンベルク一族出身の愛人ベルタを捨てる。このことが原因で彼女は精神に異常をきたし、その仕返しとして彼女の以前の恋人でオトカルの崇拝者だったザイフリートは最後には彼を殺すことになる。

オトカルはさらに妻のマルガレーテをも子供ができないという理由で離縁する。カトリックでは正当な理由がない限り離婚は認められないのでマルガレーテは離婚に反対するが、オトカルは強引に彼女に離婚を承諾させる。しかも彼は離婚してももともとバーベンベルク家出身のマルガレーテの領地であったオーストリアとシュタイアーマルクを彼女に返すつもりはなく、今や用済みとなった彼女をいわば裸同然のまま追放しようとする。あまりに理不尽なこの仕打ちはオトカルに対するマルガレーテの家臣の不信と怒りを呼び起こす。とくに、１２７３年に大方の予想に反してオトカルではなくハプスブルク家のルードルフが皇帝に選ばれて以降は、家臣たちのオトカルからの離反が次々と起こる。史実では彼らの行動の動機には、オトカルが「子供ができなかったマルガレーテとの婚姻を解消し、ハンガリー王の親戚のクニグンデ・フォン・ハリチと結

婚した」[1] ことに対するマルガレーテへの同情と並んで、「さらにオーストリアやとくにシュタイアーマルクの重要なポストをベーメン人やメーレン人に与えたことにみられるようによそ者に対するオトカルの不信感が彼らをオトカルから離反させたのである」[2] とあるように、オーストリアとシュタイアーマルクがオトカルの領地となった以上、マルガレーテ同様、今や用済みとなった両地域出身の家臣たちがオトカルによって冷遇されたことへの反発もあることがわかっている。このように兵の離反はいわばオトカルに代表される支配民族による特権的な支配に反発した他民族の反発であり、ここには民族主義的対立がすでに認められるのである。

さらにクニグンデとの結婚に関しては、オトカルは彼女をただ子供を造る道具とみなすだけで、彼女を愛してもいなければ人格を尊重しているわけでもない[3]。これがクニグンデの、「力のみなぎった自由な人間として私はここへ嫁いで来た。(・・・)。王妃というより侍女に対するようにオトカルは私の忠告や意見には耳を貸そうとしなかった。ただ自分だけが支配者でいたかったのだ。」(Ⅳ、２１３３～２１４０）という台詞となって示される。クニグンデを一人前の人間扱いしないオトカルのこの傲慢な態度が結局彼女をツァーヴィシュとの不倫に追いやり、結果的にオトカルの破滅の一因となるのである。

このようなオトカルの傲慢な態度から彼が家父長制的な絶対君主・独裁者であることがわかる。オトカルにとっては彼自身が法であり、そこでは公人と私人の区別は存在しない。しかも他人は全て道具・手段にすぎず、人権・人格を具えた尊重すべき人間ではないとする点で、彼はまさに前近代的な古いタイプの支配者と言わざるをえないのである。

このようなオトカルであるから皇帝の選出に対しても「自ら哀れなドイツ皇帝になるよりはむしろここベーメンに居住して、哀れなドイツ皇帝を笑ってやりたい」(Ⅱ、１１７７～１１７９）と強がりを言う。しかし本当は皇帝になりたくて仕方がないことは、舞台正面の使者たちに話しかけながらも選挙結果について彼の背後で交わされる宰相たちの会話を、「オトカルは極度に緊張して同じ姿勢のまま後ろの方に耳をそばだてて聞いている」(Ⅱ、１２２０行以下のト書）というト書の描写からも容易に見て取れる。だがオトカルは皇帝に選ばれなかった。その理由は帝国の使者によると以下の通りである。「オトカルが蔑みの言葉を口にして皇帝の冠と帝国を拒否した」(Ⅱ、１２４４～１２４５）こと。さらに「オトカルの妻であるマルガレーテ妃を離縁したこと。その国々の権利を侵害し、不当にも帝国に返還しようとしないこと。まだ判決が下されていないのに無慈悲にも首を刎ねたり刑罰を加えること。(・・・）我々が求める君主は慈悲深い、そして何よりも公平な君主なのだ」(Ⅱ、１２５３～１２６１)。要するに、オトカルが心にもない強がりで皇帝の冠を望まないと公言していたこと、有無を言わさずに妻マルガレーテを離縁することなどにみられる彼の非人間性、また法や権利を無視して権力を行使する独裁者、これらのことが選帝侯に彼に対する反発を引き起こした結果、彼ではなく徳の誉れ高いルードルフが皇帝に選出されたのである。

マルガレーテを離別した以上、今や彼女のもともとの領地オーストリアとシュタイアーマルク

を所有する権利をオトカルは喪失する。もし所有し続けるとすればそれはもはや違法行為となる。それゆえ皇帝ルードルフはすぐさま彼にその領地を帝国に返還するように命じる。だがオトカルはそれを拒否。時を同じくしてマルガレーテに忠実な家臣たちは人間を道具としかみない人徳のないオトカルに愛想を尽かして次々と彼のもとを去る。そしてついにオトカルとルードルフの間で戦争が勃発するが、逃亡者が相次ぐオトカル軍に勝ち目はない。いったん休戦となりルードルフに面会したオトカルはテントの中で跪いて領地の授封の儀式に臨むが、テントが破れて、軽蔑するルードルフの前に跪く惨めな姿を皆の前に晒してしまう。生き恥を晒したことに激怒した彼は再び戦闘を開始するが、味方の兵の離反は加速するばかりで、自分の敗北が確実となった時についにオトカルはザイフリートに刺し殺されて死ぬ。このようにオトカルの悲劇的な末路は読者に自業自得という印象を強く与えるものとなっている。

2

それに対してオトカルと対照的な人物がルードルフである。貧しいハプスブルク家の伯爵であるルードルフはしかしその飾らぬ人徳のある人柄によって人々に慕われている。オトカルによって離縁されたマルガレーテにルードルフは深く同情し、彼女をいたわる。また以前には、病人のところへ駆けつけようとしている牧師に増水した川を渡れるように自分の乗馬を与えたこともある。さらに皇帝になった後でも、彼は自分の兜を自分で修理したり、住民たちと気さくに話をするし、結末ではオトカルの遺体に敬意を表して自分のマントを掛けたりする。これらのことはいずれもルードルフが際立った人格者でヒューマニストであることを示している。

また皇帝としての自覚は次のルードルフの言葉に見て取れる。「私はハプスブルクでもなければルードルフですらない。この血管の中にはドイツの血潮が流れているし、この心臓にはドイツの脈が鼓動しているのだ。この体から死すべきものを抜き取って私は永遠の命をもった皇帝となったのだ」（Ⅲ、１７８６～１７９０）。ルードルフは具体的な人間性・個人を放棄し、ただ皇帝という肩書きだけの抽象的存在になろうとする。それは自分の利益やハプスブルク家の利益のために行動するのではなく、ただ帝国のためにのみ行動することを意味する。ここには私人としての己を空しくして公人としてひたすら全体のために奉仕しようとするルードルフの無私無欲の決意が見て取れる。また、皇帝は帝国の法と一体であるから、たとえ個人としては死んでも抽象的人間存在である皇帝は帝国が存在する限り永遠に滅びることはない。「永遠の命をもった皇帝」とはこのことを意味している。しかもオトカルのような家父長制的な恣意的な法は彼には無縁なものである。彼にとってはただ帝国の法が存在するのみで、皇帝はその法に最も忠実な存在なのである。このような法と皇帝の関係は近代的な法治国家における立憲君主制の先取りのようにみえるし、ルードルフはオトカルのような前近代的な古いタイプの支配者ではなく近代的な新しいタイプの支配者のようにみえる。

だが時代が封建制度の只中にあり、立法機関としての議会ももちろんまだ存在していない以上、皇帝の暴走を防ぐ近代社会における抑止力となるものは何も存在せず、悪しき皇帝になるか良き皇帝になるかはひとえに全権を持つルードルフの政治に臨む心構えにかかっているのである。その意味ではいくらルードルフの心構えが立派でも封建制度の頂点に君臨するルードルフはまさに封建制度の権化なのである。そうである以上、彼は封建制度のプラス面ばかりでなくマイナス面も体現することになると思われる。実際、ルードルフにはマイナス面が不可避的に纏い付いてこざるをえない。その様子を以下、辿ることにする。

3

ルードルフが皇帝になってから行った決定的な意味を持つ行為はオトカルに対する３回にわたる出頭要請と、ベーメンとメーレンに対する授封土の儀の要求、及びその他の領土の帝国への返還請求である。これはまさに皇帝としての正当な要求であり、全諸侯に対して差別することなく公平に接しようとするルードルフの決意の表れと解釈できる。

しかし作品では同時にルードルフのマイナス面も描かれている。公人に徹したはずなのに彼はハプスブルク家の強大化と息子たちの利益のために、結末のオトカルの死により帝国に取り戻したオーストリアとシュタイアーマルクを、本来手続き上必要な選帝侯の承認なしに、いきなり２人の息子にそれぞれ譲渡する。B. Hoffmannも言うように、「ルードルフは父として息子に土地を与える」[(4)] のであって、公人と私人の区別を忘れ、必要な手続きを怠っている点ではすでに彼は帝国の法を蹂躙しているのである。ルードルフの行為には彼の権力志向がすでに明白に認められる。

さらにルードルフは自分の意志を貫徹するために、「オーストリアの旗の白い目印が、血に染まった死体の間を縫うようにして路地を進んで行くのをみたいものだ」（Ｖ、２７４７～２７４８）と口走っているように、極めて残酷な一面も覗かせている[(5)]。目的達成のためにはどんな犠牲をも厭わないというこの姿勢もルードルフの当初のヒューマニスティクな性格とは矛盾する。

またルードルフは使者を介してオトカルに、「皇帝フリードリヒの勅許状によりオーストリアとシュタイアーマルクは封土の最後の所有者の娘たちに与えられているが、しかしその姉妹に与えられているわけではない。マルガレーテは男系の跡継ぎのいないバーベンベルク家最後のフリードリヒ公の姉にすぎないので、帝国の封土の相続はできないし、婚姻によって手に入れることもできない。それゆえ帝国に属するものは帝国に返すように。」（Ⅱ、１３０６～１３１４）と伝えている。結婚によってもオトカルがマルガレーテの領地のオーストリアもシュタイアーマルクも手に入れることは認められないとするばかりか、そもそもマルガレーテがオーストリアとシュタイアーマルクを所有していることも非合法なことで認められないとルードルフは主張して

いるのである。しかしマルガレーテの領地の所有に関しては、「たしかに特許状の文面は大公の娘たちのみに言及しているが、しかし当時の報告から明らかなように、この文書によって女系の傍系親族、即ちフリードリヒの姉マルガレーテと姪のゲルトルート（早世した悪名高き兄ハインリヒの娘）の権利も根拠づけられたとみなされたのである。」(6) ということから一般には正当な所有だとみなされていた。だからその正当性を否定するルードルフの見解は何としてもオーストリアとシュタイアーマルクをハプスブルク家の領地にしたいという彼の大胆な野望から出たものと言わざるをえない。その意味ではこの見解は彼の公平さを自ら否定する恣意的な見解なのである。

私利私欲から領地拡大に走るルードルフの野望は皇帝になった直後の彼の無私無欲とは明らかに矛盾する。しかしこの矛盾は彼が封建制度の権化であること自体に内在する。なぜなら一般的には君主制は封建制度においては世襲制となっている以上、皇帝にもそれを適用して世襲制にしたいと彼が願うようになるのは当然であろう。それゆえルードルフは、選帝侯による皇帝選挙で今後もハプスブルク家出身者の選出を確実なものにするためには、広大な領土に裏付けられた強大な権力をハプスブルク家が持つことが必要だと考えた、と思われる。しかしルードルフのこの変節により選帝侯たちが彼に不信の念を抱くことは避けられない。そのため彼の息子たちが皇帝に選出される可能性はますます減少することが予想される。

さらにルードルフの人柄においても疑問を抱かせるものがある。オトカルを破った後、彼に敬意を表してルードルフは自分のマントを彼に掛けてやる。この行為に関してK.-F. Kriegerは次のように述べている。「ルードルフは亡くなったオトカルにできる限りの敬意を表し、戦いにおける彼の勇敢さを讃えたのではあるが、しかし彼の死はルードルフにとって決して都合の悪いものではなかった。いずれにしてもルードルフはこの間に香油を施された遺体を数週間にわたりウィーンに安置させて公開し、ライバルの死を皆が確信できるように手配した」(7)。作品では遺体の安置という史実のこの行為は省略されているが、ルードルフの変質からすれば遺体の安置も今やルードルフがオトカルに取って代わって支配者になったことを皆に周知徹底させるための周到に計算された一連の行為として十分起こりうるものと読者に感じさせるように描かれている。実際、B. Hoffmannもルードルフがオトカルの遺体に自分のマントを掛けてやるのは「自分の専制政治を善意と謙虚の見せ掛けで隠蔽する」(8) ためと断言している。同様に、民衆に気さくに接するのも決してルードルフが心から望んだ行為ではなく、弱小領主で支持基盤も弱いことから民衆の支持を是非とも必要とする状況に迫られてのこととも解せられる(9)。民衆に好かれる彼の人間像はいわば彼の演技の為せる業であり、皇帝としての立派な心構えも口先だけのものだったと言わざるをえないのである。

4

ところで作品のこのルードルフのマイナス面は実は史実に合致したものなのである。史実ではそもそも選帝侯たちがオトカルではなくルードルフを皇帝に選出した理由は、ルードルフの人徳によるというよりはむしろ彼が「危険の少ないスイスの小領主」(10) であるため、彼が皇帝になっても彼らはこれまで通り「国家的立場に立つよりも、自己の所領を保持し自家の勢力を強化することに専心」(11) できると考えたことと、「ドイツの重心が東方に傾くことを恐れて」(12) 彼らがオトカルを拒否したからである。無力であるがゆえに皇帝に選出されたからには簡単に首をすげ替えられる恐れが多分に存在する。それゆえ皇帝の地位を確固とした不動のものにするためにはルードルフは所領の拡大によって皇帝権力を強化し、選帝侯たちを名実ともにその支配下に置き、皇帝選出をハプスブルク家の世襲制としなければならない。一言で言えばルードルフが「即位早々にして選びとった道は強力なハプスブルク王朝国家の建設であった。ハプスブルク家領の拡大、そして王位相続の“血統権原理”の復活」(13) なのである。所領拡大の合法的で極めて有効な方策としてルードルフがまず行ったことは未承認の領地の返還要求と、以前から慣例となっていた、「王権は没収された帝国封を満１ヶ年以内に他の諸侯に再授封すべしという“授封強制”の原則」(14) がハプスブルク家の所領拡大政策に抵触する場合にはハプスブルク家の利益を優先させ、この原則を破ったことである。オトカルから没収した所領を自分の息子たちに分け与え、ハプスブルク家の所領としたことはその典型的な事例である。その経緯を辿ってみよう。

手中に収めた皇帝権力を最大限利用して選帝侯や有力諸侯たちの勢力を殺ぐことをめざすルードルフにとって絶大な勢力を誇るオトカルは最も危険で目障りな存在であった。彼はオトカルを合法的に滅ぼし、オーストリア、シュタイアーマルク、ケルンテン、クラインなどの彼の所領を自分のものにするべく挑発的にオトカルにニュルンベルクへの出頭要請と、昔からの領地であるベーメンとメーレンの授封要請を行い、他の領地は帝国に返還するように命じた。そして「ベーメン王（＝オトカル王―引用者注）がニュルンベルクの開廷日に出廷することを拒否したこと、及び授封申請を怠っていたこと」(15) を口実に、「オトカルに帝国追放の刑を科し、１年が経過した後にはさらに重追放の刑を科した」(16) のである。それが引き金となってオトカルとの間に戦争が起こり、オトカルは滅ぼされる。皇帝になれなかったオトカルは合法的に、真綿で首を絞められるように勢力を殺がれて、滅ぼされる。このように彼の破滅は皇帝選出でルードルフに敗れた時からすでに決まっていたことなのである。そしてオトカルの死後、既定の方針通りルードルフは自分の２人の息子にそれぞれオーストリアとシュタイアーマルクを与えるのである。但し作品のようにオトカルの死の直後ではなく、史実では選帝侯の同意を得て４年後に与えている。この点で作品のルードルフの方が史実のルードルフより否定的に描かれていることがわかる。作品では彼の野望が一層リアルに表現されているのである。しかしいずれにしても先に述べたように授封強制の原則が破られたことに違いはない。しかも皮肉なことに、ルードルフが領土拡大とラ

イバルの抹殺により、強大な皇帝になればなるほど選帝侯は彼を敬遠し始め、結果的に皇帝としての彼の支持基盤は掘り崩されていく。こうして彼は抜き難い矛盾に陥る。だが彼は皇帝権力の強大化の道を選び、それに向かって突き進む。結局、息子は皇帝には選ばれず、世襲制をめざした彼の目論見は頓挫する。このようにルードルフのマイナス面においては史実と作品が基本的には合致する。

5

ところで、史実と作品のルードルフのマイナス面から出てくるもう１つの結論がある。それは、彼が領土拡大政策を推進すればするほどますますハプスブルク帝国は多民族国家にならざるをえないということである。しかし多民族国家は常に分裂の危機を内に孕む。分裂を回避するには中央集権的な強大な権力による支配が不可欠である。即ち絶対主義国家となることが不可欠である。それゆえルードルフが仮にどんなに人格的に立派な人間であったとしても、また皇帝としての立派な心構えを実践したいと願っても、ハプスブルク帝国の存続のためには彼は絶対主義国家建設に向けて邁進せざるをえない。これが彼の陥ったジレンマである。しかもこの問題に関してはルードルフの時代とグリルパルツァーの時代が重なってくる。

「かれ（＝グリルパルツァー—引用者注）が国政の規範としていたのはヨーゼフ二世（１７８０年～１７９０年在位）の改革であった」[17]。「ヨーゼフ二世はこの多民族国家を一挙に近代的な中央集権的統一国家に改革しようとした」[18]。ヨーゼフ主義と呼ばれる啓蒙主義的な彼の改革の具体的な内容は、「国家制度の徹底的な中央化、（・・・）、農奴解放（１７８１）、検閲制度の緩和、死刑の廃止（・・・）、警察制度を完備（・・・）、ドイツ語を全国家の公用語とした（・・・）、全宗派のキリスト教徒に法のもとの平等を確立（・・・）、修道院の解散を命じた。」[19] ことなどである。しかもマリア・テレジアの改革では除外されていたハンガリーとネーデルラントも今回は改革の対象となった。だがヨーゼフ２世の善意ある意図にもかかわらず余りに性急で、各民族の状況を無視した画一的な中央集権的な彼の改革はさまざまな民族的抵抗を呼び起こしたため一定の後退を余儀なくされ、目立った成果を挙げることができなかった。とくに、昔からの憲法が廃止され、自由が脅かされる危機に晒されたネーデルラントの抵抗運動は烈しく、「その年（＝１７８９年—引用者注）の１１月２５日には、フランデルンの等族がヨーゼフに対する帝位剥奪の宣言を行い、さらに、翌１７９０年１月１１日には、ニイデルラント全域がベルギー合衆国（・・・）としてオーストリアからの独立を宣言するにいたった」[20]。ヨーゼフの死後、帝位に就いたレオポルト２世（１７９０年～１７９２年在位）によってヨーゼフの改革はさらに後退の様相を呈する。

このように眺めると、ルードルフによって開始された中央集権化は、数百年後のグリルパルツァーの時代では、ヨーゼフ２世とレオポルト２世を経て、結局１８１４年のウィーン会議後

のオーストリア皇帝フランツ１世[21]と宰相メッテルニヒによる「半封建的な絶対主義国家が復活」[22]という事態に行き着くのである。一見、理想的な君主のようにみえながら実際には変節した、マイナス面を抱えた人物であると描かれた作品のルードルフは、史実のルードルフからフランツ１世に到る強権支配の流れに合致した人物像なのである。

6

この点でオトカルとルードルフは対照的である。作品前半の傲慢な独裁者オトカルは結末においてそれまでの理不尽な行いを悔いて改心し、それ以前の彼とは別人のようになる。ルードルフとの戦いでは当初はオトカルの方が圧倒的に優勢であったが、やがてルードルフは勢力を盛り返し、ついに形勢は逆転する。その理由の１つとして、オトカルがマルガレーテを離縁したため彼女の昔からの臣下たちにとってオトカルはもはや彼らの主君ではなくなり、それゆえ彼に従う必要がもはやなくなったため彼らは彼を見捨て、隊列から離れ、相手方に寝返ったことが挙げられる。オトカルは兵士たちの離反を目の当たりにする一方、それとは対照的にマルガレーテの誠意を知る。彼女も兵士たちと同じようにオトカルを裏切って仕返しをしても当然であるのに、彼女はそうしないばかりか彼のためにルードルフに調停を申し入れようとしてその途上で急死したのである。彼女のこの行為はオトカルに強い衝撃を与える。「誠実で敬虔な魂をもったお前は不当に扱われたという感情を胸に抱いて逝ってしまった」（Ｖ、２６５５～２６５６）。「マルガレーテよ、皆は私にひどい仕打ちをした！忘恩が頭をもたげて私に背き、私の側近どもは私を裏切り、私が抜擢した者は私を突き落とした」（Ｖ、２６６６～２６６９）。「お前はよく私を慰めてくれた。今度も慰めてくれ！冷たい手を伸ばして私を祝福してくれ。なぜなら死期が近づいていることだけはよくわかる。今日という日はオトカルが破滅する日だ。だからお前が祝福されているように私も祝福してくれ！」（Ｖ、２６７８～２６８２）。マルガレーテが死んで、自分にも死期が迫った今、オトカルは彼女の誠実さに感動し、彼女を捨てたことを深く後悔する。

オトカルのこの気持ちは他の人間に対する彼の見方をも変える。今や彼は人間を道具・もの、とみるのではなく、１人１人が掛け替えの無い価値を持つ存在とみる。「神よ、あなたはご自身が楽しむために人間を据えられたのだ。目的であり、それ自身であり、万有の中の世界である人間を。あなたは素晴しい作品として人間を造られたのだ。（・・・）。だが私は愚かさや気まぐれから何千という人間の命をあたかも塵を家の外へ投げ捨てるように弄んだのだ。死亡した者の中に、腹を痛めて産んだ時に母親が嬉しくて自分の胸に抱き締めなかったような者は、また父親が誇らしく祝福し、育て上げ、何年も世話をしてこなかったような者は１人たりともいなかったのだ。その子が指先に怪我をすると、両親は駆け寄って包帯を巻き、傷が癒えるまで見守ったものだ。指先、指の皮膚でさえこの有様なのだ。だが私は彼らを束にして投げ捨て、硬い剣が彼らの温かい体の中に突き刺さるのに道を開いたのだ。―神よ、オトカルに罰を下す決心をされたのな

ら罰は私にだけ下し、どうか私の民はお赦しください」（Ｖ、２８３４～２８６２）。「罰が恐ろしいのではなく、不正をなしたことが恐ろしいのだ」（Ｖ、２８７１）。オトカルは自分が人間を虫けらのごとく扱って無益な争いで大勢の人間を殺したことを後悔する。しかも全ての罪は自分にあるから自分を罰してほしいと神に祈るのである。神に代わって行動したつもりだが、今、彼は神との違いを痛感する。彼は謙虚に一介の小さな人間に立ち返ったのである。

このように兵士たちの裏切りと味方の敗走の中で失意のどん底に陥ったオトカルはマルガレーテの誠実な人間性に触れて人間の価値と命の尊さを知り、ヒューマニズムにめざめた[23]。しかもこのヒューマニズムは個々の人間を尊重するヒューマニズムから、集団としての人間全体を尊重するヒューマニズムへと拡大する。このレベルにまで到達したオトカルは、彼の非ゆえに彼を裏切った兵士たちに対しても寛大になれる。ベーメン、メーレンの王であるオトカルとは違って彼らはオーストリア、シュタイアーマルクの人間である。それゆえ彼らを尊重することは異民族の尊重に繋がり、ひいては異民族の民族主義的行動の容認に繋がる。もはや支配民族による特権の維持と他民族に対する抑圧的な支配ではなく、事実上、対等平等な関係の構築が問題となる。その場合には君主も統合の象徴としての名目的な存在にすぎないものとなる。民族主義も排他的なものではなくヒューマニズム・人類愛に貫かれたものとなりうるのである。

これをグリルパルツァーの時代に当て嵌めると次のことが言えるのではないだろうか。即ち、オトカルは、グリルパルツァーの自伝に基づいて一般に言われているようにナポレオンをモデルにしている[24]、とか或はJ. Greisが主張するように「フランツ１世への用心深い当てこすり」[25]と言うよりは、先に名を挙げたレオポルト２世にむしろ近い存在ではないかということである。レオポルト２世は妹宛の書簡の中で次のように皇帝の心構えを述べている。「どの国も民衆と君主の間で君主の権力を制限する基本法、或いは契約をもたなければならない。もし君主が基本法を守らなければ、君主は、守るという条件の下で彼に譲渡されている地位を実際、断念することになるし、民衆には君主に従う義務はもはや無くなる。執行権は君主に属すが立法権は民衆とその代表者に属す。また君主が代わるごとに民衆は新たな条件を付け加えることができる」[26]。ここには君主の独裁に歯止めをかけ、君主は法的に民衆と対等、とする極めて民主的なレオポルト２世の考え方が見て取れる。自分のこれまでの思い上がりを深く反省し、人間を尊重し、他民族を尊重する今のオトカルはレオポルト２世に勝るとも劣らぬ存在になったと言えよう。

さらに作品のオトカルも史実のオトカルも都市の発展や産業の育成に力を入れている。作品の冒頭部分で、まだ権力の絶頂にいる彼は次のように語る。「このマントはアウグスブルクで購入したものだ。金、ビロード、刺繍、これらのもの全てをここ、諸君の国で作ることができるか？できるようにしなければならぬ！必ずそうしなければならぬ！私が教えてやろう！―諸君のプラハをケルン、ウィーン、ロンドン、パリと肩を並べる都市とするのだ！」（Ｉ、４８５～４９０）。この箇所についてBDKの注は「グリルパルツァーはオトカルの進歩的な面、即ち改革、重商主義的な経済政策、プラハを都会化するための措置などに言及することを怠らなかった」[27]

と述べている。さらに、「この良き目的はしかし非人間的手段を用いて達成されるべきもの。オトカルは大量追放をやめるつもりはない。」[28] というB. Hoffmannの指摘なども併せて考えると、裏を返せば、オトカルの非人間性が克服されさえすれば彼が理想的な君主に生まれかわることも不可能ではない、と結論を下すことができよう。実際、作品の結末のオトカルのヒューマニズムへのめざめはこの結論が正しかったことを実証している。このことも彼がレオポルト２世であることを暗示していると思われる。

またレオポルト２世の政治姿勢からすると民族主義とハプスブルク家の平和的な結合は可能と言える。それは他民族の対等な自治国家の連邦制、自由な諸民族の連合という形をとる。これは１８４８年の３月革命の時に穏健な民族主義者によって提案された「オーストリア帝国をみとめながら、これを平等な権利をもつ諸民族の連邦にしようとする穏和な改革」[29]、「各民族の自治権を大幅にみとめた連邦国家制」[30]、を先取りするものと言えよう。これは排他的な民族主義ではなくいわばヒューマニズムに貫かれた民族主義である。しかしオトカルの死＝レオポルト２世の急死、とフランツ１世の保守政治によりこれは不可能となる。このことはグリルパルツァーの時代ではすでに民族和合的なハプスブルク帝国は不可能、という歴史的状況が現実のものとなっていることに符合するし[31]、またハプスブルク家はその後、３月革命期にみられるように譲歩と巻き返しを繰り返しながらついに革命期の諸民族の自治権の要求を退け、フランツ・ヨーゼフ１世（１８６７年～１９１６年在位）の下、新たな「絶対主義的な官僚国家として再建された」[32] ことに符合する。

一方、オトカルがマルガレーテを離縁したことが引き金となって彼に反旗を翻し、民族主義にめざめた側近や兵士たちの行動は、マルガレーテへの忠誠心によるものとはいえその視野は狭く、結局、自分たちの民族の利益だけを考えた利己的・排他的な民族主義と変わらない。これはグリルパルツァー時代のハンガリーに代表される諸民族の反ハプスブルク・ナショナリズムの高まりと重なる。その上、兵士たちはオトカルの改心を知る由も無い。だから彼らには排他的な民族主義を乗り越えることは不可能である。これは在位わずか２年で死去したためレオポルト２世の考えが広く浸透しえなかったことを象徴している。そのため国家の分裂を阻止するにはハプスブルク家としては絶対主義国家による強権発動しか無い。こうしてグリルパルツァーとしても歴史を歪めるわけにはいかず、ルードルフの絶対主義の路線に疑問を抱きながらもやむをえないものとしてそれを受け入れざるをえなかった。

このようにオトカルの理想は早すぎたオトカルの死により実現されなかったばかりか、ウィーン会議後の絶対主義体制の復活によりかえって遠のく結果となったが、しかしグリルパルツァーがオトカルの理想とする内容を暗示的な形であれ時代に先駆けて提示したことは、この作品の価値を高めている。

また、排他的な民族主義に基づく紛争がテロと結びついてますます拡大・激化の一途を辿っている今日、作品で暗示されたヒューマニズムに貫かれた民族主義の理想は諸民族が真剣に受け止

め、考察する価値がいまなお十分あると思われる。この作品の今日的意義と価値はまだ健在なのである。

注

テキストはFranz Grillparzer. Sämtliche Werke. Historisch=kritische Gesamtausgabe mit Unterstützung des Bundesministeriums für Unterricht und der Bundeshauptstadt Wien, hrsg. von August Sauer, fortgeführt von Reinhold Backmann. Erste Abteilung, dritter Band. (Verlag von Anton Schroll & Co.) 1931. を使用。引用の後、（　　）内に行数を示す。

また和書の縦書きの引用は全て横書きにし、その際、漢数字は基本的に算用数字に改めた。

（1）Zöllner, Erich: Geschichte Österreichs. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. 5., vermehrte Aufl. München (R. Oldenbourg) 1974, S.113.
（2）ibid., S.113.
（3）W. Naumannも「クニグンデは自分の人格が軽視されたことに対してオトカルを非難する。この軽視はただ自己だけを実現、自己の目的だけを実現しようというオトカルの利己的な衝動から行われたものである。」と述べている。
Naumann, Walter: Grillparzer・König Ottokars Glück und Ende. In: Das deutsche Drama. Vom Barock bis zur Gegenwart. Interpretation. Hrsg. von Benno von Wiese. Düsseldorf (A. Bagel) 1958, S.418.
（4）Hoffmann, Birthe: Opfer der Humanität. Zur Anthropologie Franz Grillparzers. (Deutscher Universitäts V.) 1999, S.127.
（5）D. Lorenzもこのことからルードルフを「宗教を歪曲する狂信者」と規定している。
Lorenz, Dagmar C. G.: Grillparzer. Dichter des sozialen Konflikts. Wien・Köln・Graz (H. Böhlaus N.) 1986, S.125.
（6）Zöllner, Erich: a. a. O., S.111.
（7）Krieger, Karl-Friedrich: Rudolf von Habsburg. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 2003, S.151.
（8）Hoffmann, Birthe: a. a. O., S.132.
（9）D. Lorenzも「民衆の皇帝として振舞う策略は彼の貧しさから出ている」と述べている。
Lorenz, Dagmar: a. a. O., S.126.
（10）矢田俊隆著『ハプスブルク帝国史研究―中欧多民族国家の解体過程―』（岩波書店）１９７７年、４頁。
（11）同上、７頁。
（12）今来陸郎編『世界各国史７　中欧史（新版）』（山川出版社）１９９２年、第１１刷、２１頁。
（13）林健太郎編『世界各国史３　ドイツ史』（山川出版社）昭和４９年、第１０刷、７７頁。
（14）同上、６０頁。
（15）Zöllner, Erich: a. a. O., S.114.
（16）ibid., S.114.
（17）藤村　宏著『ロマン主義とリアリズムの間―十九世紀ドイツ・オーストリア文学―』（東京大学出版会）１９７３年、９３頁。
（18）同上、９４頁。
（19）今来陸郎編、前掲書、５０～５１頁。
（20）丹後杏一著『オーストリア近代国家形成史。マリア・テレジア、ヨーゼフ二世とヨーゼフ主義』（山川出版社）１９８６年、１３４頁。
（21）彼は１７９２年～１８０６年までは神聖ローマ帝国皇帝フランツ２世でもあった。

（22）今来陸郎編、前掲書、５９頁。

（23）R. GeißlerやB. Hoffmannもオトカルについて„Humanität“、„humanistisch“と規定している。
Geißler, Rolf: Ein Dichter der letzten Dinge. Grillparzer heute. Subjektivismuskritik im dramatischen Werk—mit einem Anhang über die Struktur seines politischen Denkens. Wien (W. Braumüller) 1987, S.97.
Hoffmann, Birthe: a. a. O., S.128.

（24）グリルパルツァーは次のように述べている。「ナポレオンの運命が（・・・）ベーメン王オトカル２世といくらか似ている」。
Grillparzer: Selbstbiographie. Franz Grillparzer. Sämtliche Werke. Historisch=kritische Gesamtausgabe. Im Auftrage der Bundeshauptstadt Wien. Hrsg. von August Sauer. Sechzehnter Band. Prosaschriften IV. Wien(Kunstverlag Anton Schroll & Co.) 1925, S.165f.

（25）Greis, Jutta: Fürstenutopie im literarischen Gestern. *König Ottokars Glück und Ende*. In: Gerettete Ordnung. Grillparzers Dramen. Hrsg. von Bernhard Budde und Ulrich Schmidt. Frankfurt am Main (P. Lang) 1987, S.108.

（26）Sein Brief vom 25. Januar 1790 an seine Schwester, Erzherzogin Maria Christina. In: Görlich, Ernst Josepf: Grundzüge der Geschichte der Habsburgermonarchie und Österreichs. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1970, S.167f.

（27）Franz Grillparzer Werke in sechs Bänden. Hrsg. von Helmut Bachmaier. Bd.2, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker) 1986, S.868. (Bibliothek deutscher Klassiker 14).

（28）Hoffmann, Birthe: a. a. O., S.110.

（29）今来陸郎編、前掲書、７２頁。

（30）同上、７５頁。

（31）矢田氏も次のように述べている。「フランツ二世（＝フランツ１世—引用者注）はこうした課題をなしとげることができなかったし、好都合な機会は利用されずに過ぎ去ってしまった。そして１８２０年以後は、各民族のナショナリズムが新しい形で発展しはじめ、１８４８年の革命までに、もはや取り返しのつかない事態をつくりだしていたのである」。矢田俊隆著、前掲書、４５頁。

（32）今来陸郎編、前掲書、７７頁。

Resümee

Das Drama „König Ottokars Glück und Ende“ von Grillparzer.
— Ottokars Erwachen zur Humanität —

Sumio SHIMIZU

In dem Drama „König Ottokars Glück und Ende“, das Grillparzer im Jahre 1823 schrieb, ist König Ottokar als patriarchalischer Selbstherrscher alten Schlags dargestellt. Er beleidigt die Kultur und Tradition anderer Völker, entfernt Berta und verstößt sogar seine Frau Margarethe, um sich mit der Prinzessin von Ungarn zu verheiraten. Ihm fehlt die Tugend. Diese Tugendlosigkeit lässt die Kurfürsten Abneigung gegen ihn fassen, und nicht der große König Ottokar, sondern der kleine habsburgische Graf Rudolf wird zum Kaiser gewählt.

In auffallendem Kontrast zu Ottokar steht Rudolf. Er ist ein rechtschaffener Mensch. Er will nicht mehr als Rudolf von Habsburg, sondern nur als unpersönlicher Kaiser herrschen. Er ist sozusagen ein Vertreter des modernen konstitutionellen Monarchentums. Trotz dieser positiven Seite hat er, da er den Feudalismus verkörpert, zwangsläufig aber auch eine negative Seite. Diese wird deutlich, wenn er seine Söhne mit Österreich und Steiermark belehnt, ohne die Einwilligung der Kurfürsten zu erbitten. Das ist eine illegale Tat. Auch will er das Erbkaisertum einführen. Diese negative Seite des Grillparzerschen Rudolf entspricht der des wirklichen. Der historische Rudolf zielte auf die Stärkung der kaiserlichen Macht und verlangte deshalb von Ottokar seine Huldigung und die Auslieferung der Reichslehen. Ottokars Weigerung löst den Krieg aus. Aber er wird besiegt und getötet. Nach dem Tod seines Todfeindes ist Rudolf weiter bestrebt, sein Territorium zu vergrößern. Je größer es wird, desto mehr Völker muss das habsburgische Reich in sich integrieren. Ein Vielvölkerstaat ist in Gefahr auseinanderzufallen. Um der Gefahr auszuweichen muss Habsburg ein absolutistischer Staat mit größerer Macht werden. Zum Bild Rudolfs passt in Grillparzers Zeit Franz I.

Dagegen bereut Ottokar bitter sein bisheriges Tun, als er auf der Flucht gegen Ende des Krieges die Leiche von Margarethe sieht und ihre Treue bis zum Tode erkennt. Sein Hochmut verschwindet und die Humanität erwacht in ihm. Er versteht jetzt den eigenen Wert anderer Völker. Das ist ein Nationalismus mit humanen Zügen, der das äußerste Gegenteil zu dem exklusiven Nationalismus der Ottokar verratenden Offiziere und Soldaten darstellt. Der Darstellung Ottokars entspricht in Grillparzers Zeit Leopold II. Aber weder der Wunschtraum des einen noch der des anderen wird verwirklicht, weil sie beide plötzlich sterben. Trotzdem können wir das Drama hoch einschätzen, weil es, wie sehr auch nur ferne Ahnung sein mag, doch immerhin den Traum der beiden darstellt, und uns so die Hoffnung vermittelt, die heutige Nationalitätsproblematik lösen zu können.